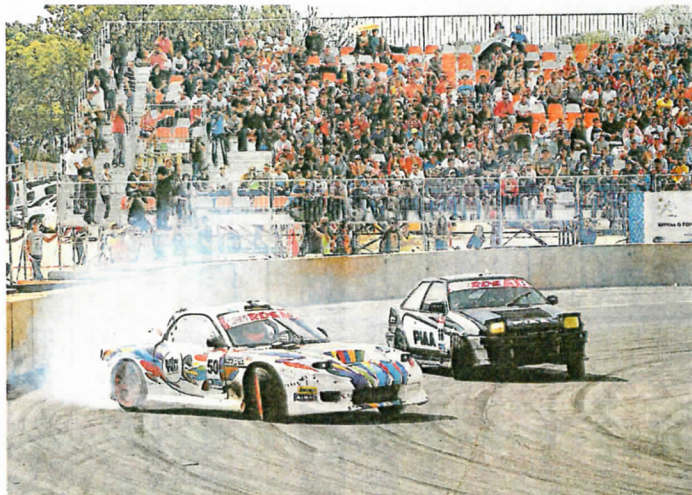


日本中古車 華麗な転身

ロシア極東ドリフト人気

シルビア、マークII、スーブラ……。懐かしい日本の中古車が、ロシアのモータースポーツで活躍している。フィギュアスケートのように、走りの華麗さを競う「ドリフト」で、手頃な価格と運転のしやすさが人気の秘密だ。



主に1990年代のトヨタや日産、マツダの名車が観客をわかせた＝9月21日、ロシア極東アルチョム、中川仁樹撮影

ドリフト

3000ほどのコースを、タイヤを滑らせながら走る競技。基本的には2台で走り、車の速度や進行方向に対する車の角度などを採点する。ドリフトは山道を走るラリーなどで後輪を滑らせながらカーブを曲がる技術として知られる。

「3、2、1」。カウンタダウンが終わると同時に2台の車が猛烈な勢いでスタートした。日産自動車のシルビアとスカイライン。ともに10年以上前の車だ。カーブに来ると、並んだまま車の後部を大きく振り、斜めになって曲がって行く。

自由に改造

一番人気はシルビア。地元選手の上位16台中、7台を占めた。チブチャン選手(28)の愛車は99年式。10年前、静岡県で数十万円で購入した。鮮やかな黄色に塗り直されて新車のようだ。「車体のバランスがとていい」とほれ込む。トヨタ自動車のマークIIは「サムライ」の愛称で親しまれている。サポーチキン選手(27)は、ドームエンジンもない95年式の車体を購入した。「どうせ改造するから、何もない方が安くていい」と話す。トヨタ車に日産のエンジンを積むなど、車の改造に工夫を凝らすのも楽しみの一つだ。

90年代の日本車には、まだバブルの余韻が残っており、ドリフトに向いた後輪駆動の高性能車が数多く生まれた。その後、乗用車の主流が、燃費がよく、車内が広い前輪駆動車に移ったことも、古い車が使われている背景にある。

プロも誕生

自動車競技は最高峰のF1をはじめ、改造した市販車のレースや、山道や雪道で競うラリーなど、欧州発祥のものが多く、今月10、12日には、今年2月に冬季五輪が開かれたソチで、ロシアで初めてのF1のレースが開かれる。

漫画に憧れ

第一人者のシミニュークさん(37)は「日本のドリフトのDVDが手に入り、華麗な運転に夢中になった」。選手(42)は、人気漫画「頭文字(イニシャル)D」に登場する走り屋に憧れた。車は主人公と同じトヨタのスパリナー・トレノ。

「いつかは主人公のように走りたい」と練習に励む。今大会の最終日には、川畑真人選手ら日本の歴代王者らを抱き、初の日ロ対抗戦を開催。6千円程度と高い入場料にも関わらず、8日間延べ1万人の観客が集まった。熱狂ぶりは日本をしのぐほどだ。もっとも結果は、日本人が4位までを独占して意地を見せた。(ウラジオストク＝中川仁樹)